

飛鳥寺旧境内の調査

—第197-1・2・6次

1 はじめに

第197-1・2次調査は、明日香村大字飛鳥地内を通る県道権原神宮東口停車場飛鳥線の電線共同溝埋設工事にともなう事前調査である。事業予定地は、飛鳥寺跡・飛鳥寺下層遺跡にあたり、前年度に西方でおこなった第192-1・9次調査では、膨大な量の瓦が出土した。このため、関連する建物遺構などの検出を期待して、ハンドホール設置部分7ヵ所について、東西2.2~4.4m、南北1.4~2.6m規模の調査区（1~7区）を設け、発掘調査を実施した（第197-1次調査）。管路部分については、工事掘削時の立会調査を基本としたが、追加でハンドホールが設置された部分（1区）については、発掘調査に切り換えた（第197-2次調査）（図152）。

調査面積は、第197-1次調査が49.5m²で、第197-2次調査では立会調査対象面積239.6m²のうち約10m²を発掘調査した。調査期間は、第197-1次調査が2018年4月2日

から5月10日まで、第197-2次調査が同年5月14日から2019年2月22日までである。
(尾野善裕)

第197-6次調査は、明日香村大字飛鳥53-2番地の水路建設工事にともなう事前調査である。調査地は、飛鳥寺の北面回廊東端から東へ約100mの水田に位置しており、調査地の北方約180mの地点では飛鳥寺の寺域を区画する塀の東北隅部が検出されている（第36-9次調査）。調査区の東部は、飛鳥寺の東限の区画施設の延長線上にあたり、それに関連する遺構の検出が予想された。調査区は東西約40m、南北約2m、面積は約87m²である。調査は2019年1月9日に開始し、3月1日に終了した。

(土橋明梨紗)

2 第197-1・2次調査

基本層序

上層から①路面舗装のアスファルトおよび碎石層（厚さ30~55cm）、②近世の整地土層（厚さ35~90cm）、③近世以前の土器・陶磁器片と大量の瓦を含む灰褐色シルト層（厚さ20~40cm）、④緑灰色砂層（厚さ15~45cm）、⑤瓦と土師器・須恵器を僅かに含む緑灰色粘土もしくは黄褐色シ



図152 第197-1・2・6次調査区位置図 1:2000

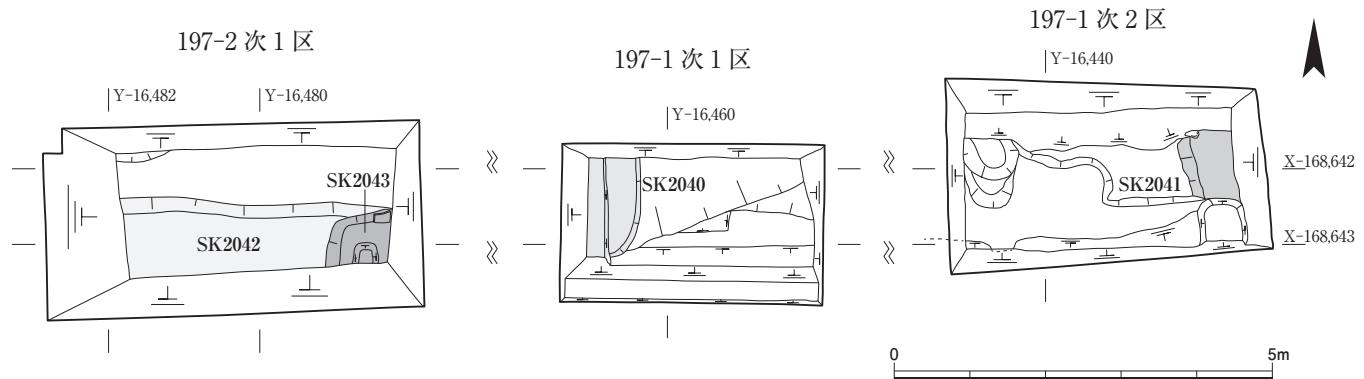


図153 第197-1・2次調査区遺構図 1:100

ルト層（厚さ15~60cm）、⑥青灰色もしくは緑灰色の粘土・シルト・砂礫層（無遺物層）の6層に大別でき、⑥層上面は概ね標高103.4~103.8mである。ただし、第197-1次調査7区のみ大きく様相を異にしており、④層の下から、瓦と土器の小片を僅かに含む暗灰色砂層の堆積（厚さ約85cm）をはさんで、水性堆積と思しき灰白色粗砂層を検出した。しかし、既設管路による攪乱で地盤が軟弱化しており、狭小な調査区の中では安全を確保しつつ詳細な調査をおこなうことが困難であったため、灰白色粗砂層中の遺物包含の有無については確認できなかった。

検出遺構

8カ所の発掘調査区のうち、西寄りの第197-1次1・2区と第197-2次1区で土坑数基を検出した（図153）。また、第197-1次7区には、土層堆積状況から調査区全体の平面形状（東西4.4m、南北1.9m）を超える大規模な溝状遺構、もしくは自然地形としての谷が存在すると考えられる。それら以外には、近世の整地土を除いて顕著な遺構を認めなかった。

土坑SK2040 第197-1次調査1区の西端で検出した大型土坑。調査区内では南肩と東肩を検出したのみで全容は不明であるが、東西0.8m以上、南北1.5m以上の平面規模と1.0m以上の深さを有する。埋土は③層に似た灰褐色シルトであるが、瓦片をより多く含んでおり、重複関係から③層より古いことがわかる。瓦のほか、土師器・須恵器の小片が出土した。

土坑SK2041 第197-1次調査2区の東端で検出した深さ0.2mの土坑。西肩を検出したのみで、南端と北端を攪乱によって断ち切られており、東端は調査区外に当たるため、平面規模については東西・南北とも0.9m以上

あることしかわからない。埋土は③層に似た灰褐色シルトで、土器と少量の瓦を含む。

土坑SK2042 第197-2次調査1区の南半で検出した深さ0.5mの土坑で、北肩を検出したのみであるが、東西3.6m以上、南北1.0m以上の平面規模を有する。にぶい黄褐色シルトの埋土から、ややまとまった量の瓦と奈良時代中頃の土器が出土した。

土坑SK2043 第197-2次調査1区の東南隅で検出した深さ0.6mの土坑で、重複関係にあるSK2042より新しい。南肩と東肩を検出したのみで、正確な平面形状は不明だが、東西1.0m以上、南北0.7m以上の規模を有する。埋土は褐色の砂泥で、SK2042と同様に瓦と奈良時代中頃の土器を含む。

出土遺物

土器 古代の土師器・須恵器をはじめとして、整理用木箱に32箱分の土器・陶磁器が出土した（図154）。③・④層から管路部分の立会調査（第197-2次調査）で出土したものが大半で、中心伽藍から離れるにしたがって中・近世陶磁器の比率が増す傾向にある。

遺構からの出土品は必ずしも多くないが、SK2041から須恵器の壺（6）、SK2042から土師器の杯A・皿A（2）・甕と須恵器の杯B蓋（4）・皿B（5）・皿C・甕、SK2043から土師器の椀C（1）・盤（3）などが出土した。SK2042・2043出土の土師器・須恵器は、概ね奈良時代中頃の特徴を示す。

（尾野）

瓦磚類 本調査では大量の瓦磚類が出土した（図155・表22）。多くは近世の整地土（③・④層）から出土しており、遺構にともなうものは少ないが、出土した瓦磚類は古代から近・現代に及び、飛鳥寺創建期の資料も多く含まれ

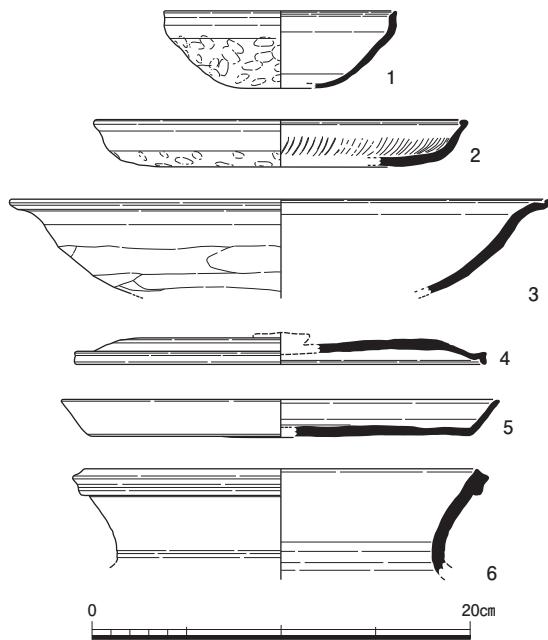


図154 第197-1・2次調査出土土器 1:4

る。ここでは、軒瓦および道具瓦、磚を報告する。

1～3は弁端桜花形の素弁十弁蓮華文の飛鳥寺I型式。今回の調査で最も多く出土した。1は当初範のIa。瓦当厚は1.1cmと薄く、にぶい赤褐色を呈する。灰～暗灰色のものも多い。2は中房に圈線を彫り加えて中心蓮子を大きくしたIb。瓦当厚は1.5cmと厚くなり、灰色のものが多い。3は範型の被りをなくしたIc。外縁は2.4cm程度まで広がり、瓦当厚も2cm近い。丸瓦部先端の凹面側に縦方向のキザミをほどこす。いずれも軟質の焼成で灰白色。

4・5は弁端点珠の素弁十一弁蓮華文の飛鳥寺III型式。4は間弁が中房まで到達しないIIIa。瓦当厚1.9cm。

5は間弁が中房まで到達するIIIb。瓦当厚は2.2cmとIIIaに比べて厚く、瓦当裏面中央部にかけて膨らみをもつものが多い。

6は飛鳥寺V型式。飛鳥寺III型式に似るが、瓦当径が小さく、蓮子配置は1+6である。胎土は粗く、黒色の砂粒を多く含む。1点のみ出土した。

7は飛鳥寺VI型式。弁端点珠でIII型式に似るが、弁端が丸みを帯びる点、範型が外縁に被る点などはI型式と共通する。今回出土したVI型式には瓦当裏面をナデで平滑に仕上げるものと、裏面下半部を周に沿って、つまみ上げるように整形したものの2種類がみられた。

8は外縁をもたない素弁九弁蓮華文の飛鳥寺VII型式。瓦当厚1.2cm。やや軟質の焼成で灰白色を呈する。

9は单弁八弁蓮華文の飛鳥寺X I型式。山田寺式に近いが、素文直立縁で蓮子配置は1+8である。

10は複弁八弁蓮華文の飛鳥寺X II型式のうち、単位の細かい面違鋸歯文縁をもつX II C。川原寺創建軒丸瓦601Cと同範。瓦当裏面を中凹みにし、周縁部を堤状に仕上げる。

11・12は素文斜縁の複弁八弁蓮華文の飛鳥寺X IV型式。創建瓦であるI型式に次ぐ出土量であり、今回出土した多くが範を彫り直したX IVbであった。11はX IVa。範の彫り直し以前のもので、中房の蓮子が小さい。12は彫り直し後のX IVbで蓮子が一回り大きくなる。瓦当厚1.9cm、側面には範端の痕跡が明瞭に残る。蓮弁と外縁の間に大きな範傷があり、範傷3段階に相当するとみられる¹⁾。

13は複弁蓮華文の飛鳥寺X V型式で、平城京元興寺創建瓦6201型式と同範。今回出土したものの多くは外縁に線鋸歯文を彫り加えたX Vbであり、軟質の焼成のものが多い。

14は飛鳥寺東南禪院所用の飛鳥寺X VII型式。外縁は素文直立縁、内縁に小粒の珠文を配置する。瓦当厚2.1cm。

15は単位の細かい雷文縁の複弁八弁蓮華文軒丸瓦。SK2040より出土した。瓦当裏面は周縁から約1.8cmの幅を堤状に仕上げる。瓦当側面には一部範端がみえる。緻密な胎土や灰白色の色調から、小山廃寺（紀寺）KYM-1型式1類と同範とみられ、小山廃寺金堂および講堂に用いられたものとされる²⁾。

16は石神型式。緻密な胎土や色調、中房の大きさから石神A型式と判断した。

17は弁央に凸線をおく素弁八弁蓮華文の垂木先瓦。飛鳥寺IV型式。

18・19は四重弧文軒平瓦の飛鳥寺II型式。今回の調査で最も多く出土した。18はII C。弧線の断面形はやや丸みを帯びる。頸長6.8cm、深さ1.4cm。19はII F。上から第1・4弧線の幅が太いのに対し、第2・3弧線の幅が細く、立ち上がりも低い。頸長5.7cm。黄灰色を呈する。

20は五重弧文の飛鳥寺III型式。頸長7.0cm。

21は飛鳥寺IV型式。大官大寺所用均整唐草文6661Bと同範で、頸長10.3cm、深さ2.5cm。頸は粘土板を貼り付け

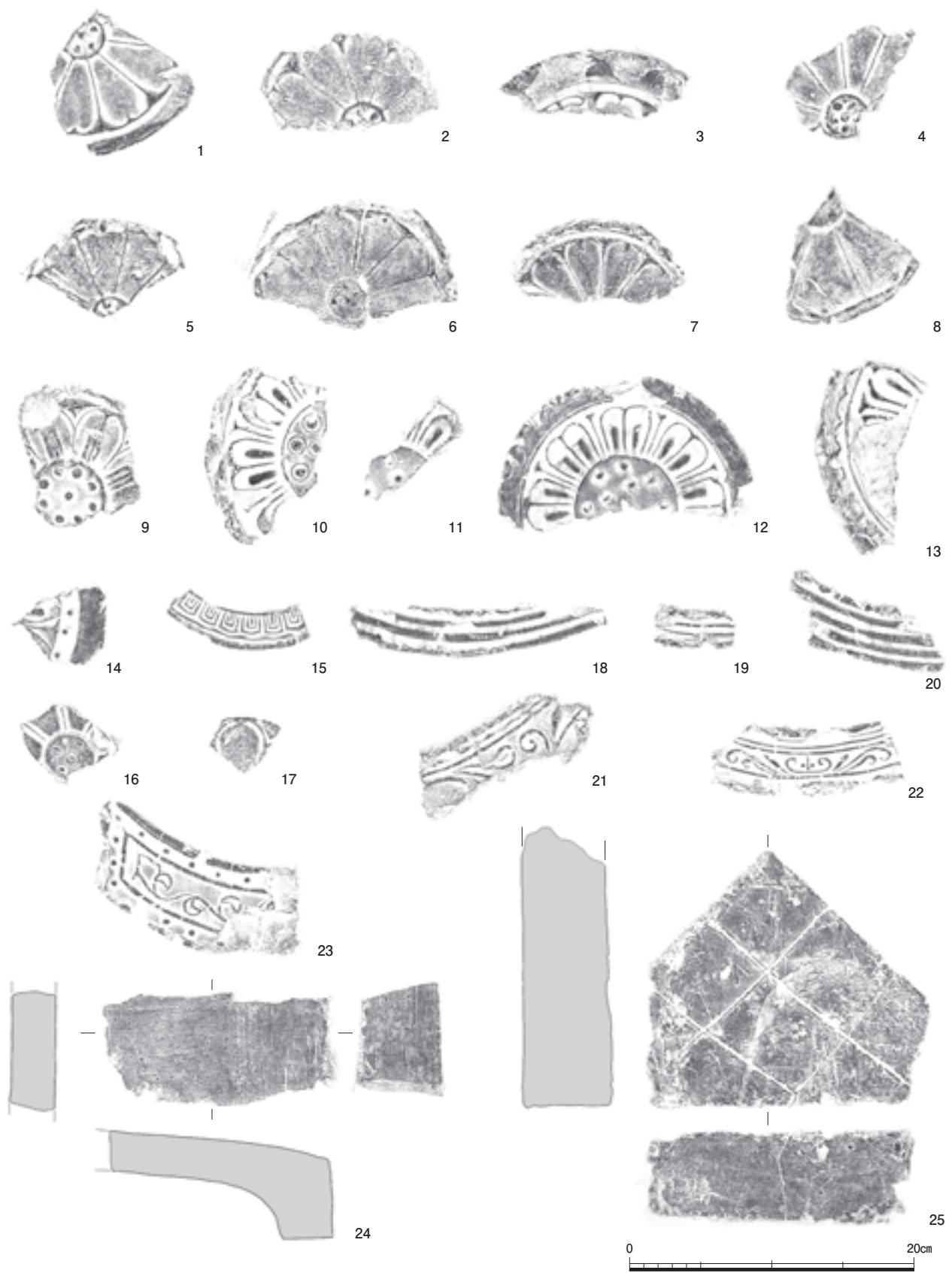


図155 第197-1・2次調査出土瓦磚類 1:4 (3・7・12・14・15・18が第197-1次、その他が第197-2次)

表22 第197-1・2次調査出土瓦磚類集計表

| 軒丸瓦 | | | 軒平瓦 | | | その他 | |
|--------|---------|----|-----------|-----|--------|----------|----|
| 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 | 種類 | 点数 |
| 飛鳥寺 | I a | 12 | 飛鳥寺 | II | 5 | 垂木先瓦 | 1 |
| | I b | 3 | | III | 1 | 熨斗瓦 | 5 |
| | I c | 2 | | IV | 2 | 面戸瓦 | 3 |
| | I | 19 | | V | 1 | 隅木蓋瓦(古代) | 2 |
| | III a | 2 | | VI | 5 | 隅切平瓦 | 5 |
| | III b | 3 | 近世 | | 28 | 瓦製円盤 | 15 |
| | III | 7 | | | | ヘラ描き丸瓦 | 7 |
| | V | 1 | | | | ヘラ描き平瓦 | 18 |
| | VI | 4 | | | | 鬼瓦(近世) | 1 |
| | VII | 1 | | | | 隅木蓋瓦(近世) | 2 |
| | XI | 2 | | | | 刻印平瓦(近世) | 2 |
| | XII C | 1 | | | | 磚 | 37 |
| | XII | 2 | | | | 小仏像 | 1 |
| XIV a | 1 | | | | | | |
| XIV b | 12 | | | | | | |
| XIV | 7 | | | | | | |
| XV b | 3 | | | | | | |
| XV | 1 | | | | | | |
| XVII | 2 | | | | | | |
| 石神A | 1 | | | | | | |
| 紀寺 | 1 | | | | | | |
| 不明(古代) | 7 | | | | | | |
| 巴(近世) | 23 | | | | | | |
| 計 | 117 | | | 42 | | | |
| | 丸瓦 | | 平瓦 | | 榛原石 | | |
| 重量 | 759.0kg | | 2,757.3kg | | 30.2kg | | |
| 点数 | 6,398 | | 31,837 | | 88 | | |

た後、再度粘土を瓦当面に向かって薄く引き伸ばすように貼り付けて整形する。淡褐色でやや軟質の焼成である。

22は飛鳥寺V型式で、6681Eと同範。瓦当厚4.3cmと小型で、平城宮東院地区や平城京左京二条二坊五坪(藤原麻呂邸)等多くの出土例がある。

23は均整唐草文の飛鳥寺VI型式で、平安時代初期のものである。

24は隅木蓋瓦。厚さ3.0~3.5cm、裏面はナデで調整し、屈曲部の内側はゆるやかに仕上げる。表面および端面にはケズリをほどこす。

25は磚。斜格子の線刻が入る面があり、その面を下にして据える敷磚とみられる。厚さ6.3cm。線刻の無いものも多い。

今回の調査区では、飛鳥寺創建瓦であるI・III型式および7世紀後半のXIV型式が多く出土した。これは昨年度の第192-1・2次調査成果(『紀要2018』)と同様であり、飛鳥寺中心伽藍の出土様相(『飛鳥寺報告』)とも共通する。一方で、東南禅院所用のXVII型式や、奈良時代の軒丸瓦XV型式および軒平瓦V型式が出土した点は、今回の調査区の特徴である。特に紀寺型式については、飛鳥寺で

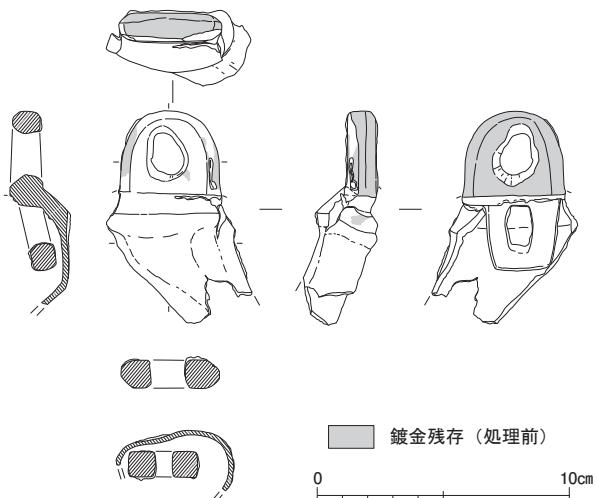


図156 第197-2次調査出土風鐸 1:3

のこれまでの出土例は明日香村教育委員会の調査による1点のみであり、今回の調査地に近い地点で出土している³⁾。これらが調査地に近接する講堂などの施設に用いられた軒瓦である可能性もあるが、さらなる検討が必要である。

(道上祥武)

金属製品ほか 風鐸1点が、第197-2次調査の立会調査部分の近世整地土から出土した(図156)。欠損やゆがみが著しいが、鈕から身上半部にかけて残存する。青銅に鍍金をほどこした金銅製である。鈕を含めた残存長8.4cm、舞の残存幅5.1cmである。身の断面形は正確には知りえないが、残存する舞の形状からみても、稜をもたない楕円形であったとみられる。身の厚さは2~6mmである。鈕は半円形で、長さ3.3cm、幅4cm、厚さ1.3cm、中央に不整形の鈕孔をもつ。内部に風招を吊るための方形の吊手が一体鋳造により作られている。なお、型持の有無は不明で文様はない。

風鐸には建物の軒先に吊るす大型のものと、塔の相輪に吊るす小型のものがあるが、本例は小型に該当する。鐸身の全形は不明であるが、舞に対する鈕の大きさ、断面形状、推定される大きさは兵庫県伊丹廃寺例や茨城県新治廃寺例に似る。奈良時代以降、大型、小型ともに、風招を懸垂するための吊手が一体鋳造されず、別造りで鋳包む方式、型持孔に吊金具を引っかけて風招を懸垂する方式に代わるという傾向が認められ、この点から本例は奈良時代以前に位置づけられる可能性がある。

このほか、主に近世の整地土から、煙管吸口・耳かき・鉄釘・不明鉄製品・石硯・砥石・輔羽口・不明製品の土

製錆型・鉄滓・不明骨角器・貝釦残滓などが出土している。
(片山健太郎)

まとめ

面積が狭小であるため、今回の調査により得られた情報は限られているものの、奈良時代中頃の遺物を含む土坑SK2042・2043を検出したことは、奈良時代の軒丸瓦XV型式・軒平瓦V型式の出土と相まって、寺域東北部の伽藍整備が奈良時代前半から中頃にかけて進んだことをうかがわせる。

また、発掘調査区の土層堆積状況からは、現在県道となっている飛鳥坐神社の西参道を境として、かつては北側が急激に落ち込む地形であったことを読み取ることができた。この落ち込みは、近世の陶磁器片を含む整地層(②・③層)によって、南側から順次埋め立てられているので、現在のように参道の両側にほぼ同じ高さで家屋が建ち並ぶ景観が成立したのは近世になってからのことと考えられる。これは、寛政三年(1791)刊行の『大和名所図会』に飛鳥社(飛鳥坐神社)西参道の両側に家屋が建ち並ぶ景観が描かれていることとも整合的で、参道北側の埋め立てが18世紀末までに相当進行していたことがわかる。瓦を大量に含む③層は、近世に調査地一帯が整地された際に、付近に散乱していた古瓦を集めて投棄した結果、形成されたものであろう。

遺物では、飛鳥寺の堂塔所用と考えられる金銅製の風鐸の出土が特筆され、膨大な出土量の瓦磚類とあわせて、これまで詳らかでなかった寺域北部の様相を解明していく上での基礎資料を得ることができた。
(尾野)

3 第197-6次調査

7世紀後半およびそれ以前の土器を含んだ古代の整地土層上面において、石列4条を検出した(図157)。検出した石列は、調査区中央に南北方向のもの1条、調査区東部に南北方向のもの1条、東西方向のもの2条である。東西方向の石列2条の掘方には重複関係がみられ、北側の石列が新しい。

古代の整地土掘削後、調査区の中央と東部で柱穴各1基を検出した。調査区中央の柱穴は、掘方が一辺約1.0mで、その東西で柱穴を検出できなかったことから、南北方向の堀あるいは柵列と考えられる。

調査区東部で検出した柱穴は、掘方が一辺約0.6mで、

柱根が残存していた。この柱穴の東西にも柱穴がなく、南で柱穴らしき掘り込みを検出しているが、その評価については検討中である。

出土遺物は、古代の整地土に含まれていた飛鳥寺所用の瓦を主体とし、土器、円面硯などがある。また、内面に漆が付着した杯、壺などが出土している。

このほか、調査区中央で検出した木屑層から、木製品、習書を中心とした木簡(削屑を含む)などが出土している。

遺構・遺物の詳細については、現在整理中であり、『紀要2020』にて報告する予定であるが、飛鳥寺所用の瓦や円面硯片が出土していることからも、周辺には飛鳥寺に関連する施設の存在が考えられる。さらに重複する遺構の状況から、古代の飛鳥寺東方域においては、繰り返し土地利用がおこなわれたことがうかがわれる。
(土橋)

註

- 1) 花谷浩「瓦からみた飛鳥寺造営、そして飛鳥池遺跡」『古代』141、早稲田大学考古学会、2018。
- 2) 近江俊秀「7世紀後半の造瓦の一形態－明日香村小山廃寺を中心として－」『瓦衣千年』真陽社、1999。
- 3) 清岡廣子「1997-21次 史跡飛鳥寺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報(平成9年度)』明日香村教育委員会、1999。



図157 第197-6次調査区全景(東から)